

## ▶ 有吉佐和子の突然の死

周揚が壇上で挨拶している時、有吉佐和子は周揚に向かって声をあげて手を振りました。異常な昂揚感というか、その光景に目を見張りました。たぶん彼女はその時、とてもハイな躁状態だったのでしょう。それから3か月余、彼女は黄泉の国に旅立ちました。享年53歳。あまりにも若い〈才女〉の死です。

有吉は睡眠薬を常習し躁鬱症状がひどかったようです。朝起きてこない彼女を家人が心配になって部屋に入ると、有吉はベッドの中で亡くなっていました。一時、自殺ではないかとも言われたその不審死は、過剰な睡眠薬の飲み過ぎだったかもしれません。

とても惜しい死でした。有吉は周揚らの中国文学者と親しかっただけではなく、彼女は日中国交回復以前から、実は知られざる貢献をしていたのです。それを述べるには、周恩来総理の日本の大衆文化状況に関する思いを明らかにする必要があります。

## ▶ 周総理の日本への関心

周恩来はかつて日本に留学していたこともあり、日本に深い関心を寄せ、隣国である日本との国交回復を一日も早く実現したいと思っていました。しかし日本の歴代保守政権はアメリカに追随し、中国敵視政策を取っていました。そのため、政府間レベルの正常化が望めない時代、日中の心ある人たちは、民間交流こそが大事だ、中国語で言えば〈以民促官〉が大切なのだ、つまり民間の交流活動で政府や官界レベルに国交回復を促すことが重要だと思っていました。

それ故に周恩来は、日本の大衆的な動き、大衆の心をとらえていた日本の宗教教団に関心を持ち、とりわけ創価学会には非常に強い関心を持っていました。

時に新興宗教とも呼ばれるいわゆる民衆宗教は、明治維新以後になっていくつか生まれました。長い間の幕藩体制が崩壊し、新たな時代の変わり目、激しい変革期に、未来を見通せない庶民たちがなんとか生き延びるためにどう対応するか、無意識のうち

にも新たな指針を求めていました。このような時代の雰囲気やうまく掴み、庶民たちの声を己の身体で聞き取る能力を持つ教祖的な人物が多く輩出しました。その象徴的な人物であるシャーマンのような存在が天理教の中山ミキ、そして大本教の出口なおらの女性です。

出口なおは、無学文盲の庶民の女性です。苦勞に苦勞を重ねながら、たくさんの子供たちを育て家庭を切り盛りしていましたが、たびたび予言めいたことを口走り、牢屋に入れられました。ところがある日、なおの身体に、ある神がかかりました。いわゆる憑依現象です。

どこからともなく〈筆を持つ〉という声に驚きながらも出口なおは筆を持ち、いろんなものを書きつけました。いわゆる〈筆先〉と呼ばれるものです。精神分析学の祖、ジークムント・フロイトがいうところの自動書記現象が起こったのです。

## ▶ 周恩来と大本教

出口なおに神が降臨した地は京都府の丹後、綾部です。なお自身、書きつけたもの

を判読することはできません。後年、出口王仁三郎が綾部を訪ね、その書きつけたものを明らかにしました。その筆先の内容は、日本の近代化への疑問、富国強兵に走る日本の国家に対する批判、西欧に追随して進める文明化にまい進する日本に対する強烈なアンチテーゼを示す内容でした。ちなみに出口王仁三郎は後年、エスペラントの意義を認めて大本教団にエスペラントを導入しましたが、それについてはいずれ詳述したいと思います。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」  
周恩来と日本の宗教教団

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書

『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おおるい よしひろ）

この4月亡くなった一橋大学名誉教授の安丸良夫氏の名著『出口なお』は、余すところなく、出口なおの魅力ある〈預言者〉の面のみならず、日本の底辺に生きる勤勉で実直な庶民の女の生涯を明らかにしています。

私自身、この本が刊行された1976年以前から大本教に関心を持っていましたので、この『出口なお』が発刊されるやすぐ買い求めて、出口なおの思想に魅せられました。

当時、いわゆるカウンターカルチャーの動き、反文明的な思想や生き方に関心を持っていた私は、大本教に関心を持ち、同世代の若いエスペランティストの大本信徒や、大本教団の外郭団体である人類愛善協会(京都府亀岡市)が発行する月刊の「人類愛善新聞」の記者と親しくなりました。

かつて鶴見俊輔氏は、“いま「人類愛善新聞」が一番面白い”と言っていた頃があったようです。民衆宗教に深い理解を示していた鶴見氏は、教祖には人を縛る人と縛らない人がいるが、出口王仁三郎は人を縛らない教祖だと高い評価を与えていました。その「人類愛善新聞」に毎月、原稿を送るようになりました。

そこでは、当時の時代や世相の流れに抗して異議を提起し活動する人たちに焦点を当て、無農薬野菜を販売する長本商会や水俣病患者を支援する〈甘夏広場〉の若い人たち、ヘルプ・バングラデッシュ・コミッティーなどを取材して原稿を書くうち、ますます“反時代的な生き方”に共感を持ち、単身、東京を離れて緑多い綾部に移りました。

その綾部で出口栄二氏に出会いました。出口氏は、実は周恩来と因縁浅からぬ人物なのです。出口氏は王仁三郎に乞われ、四代目の教主になるであろう直美さんの夫になります。代々「教主は女であるぞよ」という開祖・出口なおの言葉に従い、大本教団の教主は、出口家の長女が継承することになっています。四代目の教主になる直美の夫になるということは、教主を補佐する重要な役割を担います。

そして出口栄二氏は、大本の世界平和精神を広め、活動するために積極的に行動し、東京・杉並の婦人

たちが立ち上がった時とほぼ同じ頃、原水爆実験禁止の署名活動を全国的に展開し、「大本、ここにあり」と、人々から言われるような大衆運動を行い、また1960年の反安保闘争では宗教界の先頭に立って活動していました。

その出口栄二氏は1962年、ソ連のモスクワで開催された世界宗教者会議に出席しました。そこで中国仏教協会の会長である趙樸初氏に出会うのです。趙樸初氏は1936年より抗日救亡運動に参加し、新中国建国後は中国仏教協会の発足に貢献し、秘書長、副会長、会長などの要職を歴任し、周恩来総理からとても信頼を得ていた人でした。

その趙樸初氏は出口栄二氏に、この会議が終わったら「北京に来ませんか。ご招待します」と言われたのです。当時、40歳ほどの若い出口氏はこの申し出を受け、国交が未だ回復していない北京にモスクワから入国しました。北京に到着後、中国側から「北京ではどのような方とお会いしたいですか」と訊ねられたところ、出口氏は「毛沢東主席か周恩来総理にお会いしたいですね」と答えました。

後年、出口栄二氏は私に「よくあんなことが言えたと思う。自分も若かったからね」と笑いながら述懐していました。とりわけ有名でもない一人の宗教家である出口氏の要望でしたが、ある日、中国側から「これから周恩来総理がお会いします」と言われました。

この会談で出口氏は大本について語りました。戦前に二度、天皇制国家権力から徹底的に弾圧された歴史を周総理に話すと、周恩来はそばにいた記者たちに、「もっと大本教を中国に紹介しなさい」と語りました。

この対談の様子は『人民日報』に写真入りで掲載され、また月刊の『人民中国』(日本語版、この雑誌は各国語で発行され、エスペラント版もありました)にも写真入りで記事になったのです。ともあれ、周恩来総理は日本の宗教界の動きにも目を配っておりました。とりわけ日本の大衆に根付いていた大教団の創価学会には注目しており、この創価学会と中国との結びつきに、有吉佐和子は少なからぬ役割を果たしていたのです。